シャンカラの哲学への宗教学的視座

澤 井 義 次

はじめに

インドの不二元論ヴェーダーンタ哲学者のシャンカラ (Śaṅkara 七〇〇—七五〇ごろ) には、伝統的におよそ三百点の著作が帰せられている。シャンカラ派僧院の法主は「世師」(Jagadguru) とよばれるが、伝統的に「シャンカラチャーリヤ」(Śaṅkarācārya) とも呼ばれてきた。そういうこともあつて、シャンカラの名で書かれた著作の中で、どれが初代のシャンカラの著作であるかを識別することは極めて難しい。シャンカラ派の宗教伝統において、シャンカラに帰せられてきた著作の中には、インド学の実証的な文献学によれば、シャンカラ自らが著したと考えられる真作のほかに、後代の偽作もかなり含まれている。むしろ、伝統的にシャンカラに帰せられている著作の大半が偽作と考えられる。

ところが、シャンカラ派の宗教伝統における信仰現象を宗教学的視座から理解しようとするとき、シャンカラの著作を

真作と偽作に分けて、真作と考えられる著作だけに依拠して、シャンカラの哲学を理解して事足りるというわけにはいかない。それは偽作と考えられる著作を、シャンカラ派の信仰者ばかりでなくインドのヴェーダーンタ研究者たちのほとんどすべてが、シャンカラの「真作」として確信しているからである。それらの著作がシャンカラ派伝統において、信仰のコトバあるいは聖典という意義を担ってきたという具体的信仰の事実を宗教学的に見過ごすことはできない。従来のインド文献学の視点からみれば、シャンカラの偽作はほとんど研究対象に値しないかもしれないが、宗教学的視座からみれば、それはシャンカラ派の思想と信仰の意味構造を掘り下げて理解するうえで大変重要なデータであると言えるであろう。

この拙論では、シャンカラの哲学に関する従来の研究を踏まえながら、シャンカラの哲学文献やバクティ讃詩が、シャンカラ派の宗教伝統において、どのような意義を担ってきたのかを再検討するための宗教学的視座を提示したい。

一 シャンカラ派における「偽作」の意義

シャンカラ派の宗教伝統においては、シャンカラは開祖とみなされ、かれの哲学文献は教義としての意義をもってきた。伝統的にシャンカラの著作とみなされるおよそ三百の文献を大別すると、聖典に対する注解書、教義綱要書それに讃詩(bhakti-stotra)に分類することができる。シャンカラ派の伝承によれば、シャンカラはインド中を遊行して廻る中に論敵を破って、東西南北にそれぞれ僧院(maṭha)を創設したといわれる。インドにおいて、シャンカラは一般的に「シャンカラ」の名のあとに「アーチャーリヤ(師)」の語を付け加えて、「シャンカラーチャーリヤ」とよばれるが、すでに示唆したように、シャンカラ派僧院の長も代々、今日まで「シャンカラーチャーリヤ」とよばれてきた。⁽¹⁾そのために、シャンカラと後代のシャンカラ派僧院の長たるシャンカラーチャーリヤはしばしば混同されてきた。伝統的にシャンカラに帰せられている著作の中には、後代のシャンカラーチャーリヤたちの著作がかなり含まれていると考えられる。

シャンカラ派の信仰者たちが伝統的にシャンカラに帰せられていて、シャンカラの著作であると信じている著作の大半は、文献学的視座からみれば、シャンカラ自らの著作ではなく後世の作品であると考えられる。少なくともシャンカラの

真作として認められるのは、『ブラフマ・スートラ注解』、諸『ウパニシャッド注解』、『バガヴァッド・ギーター注解』さらに独立作品『ウパデーシャ・サーハスリー』という哲学文献である。⁽²⁾伝統的にシャンカラに帰せられている著作の「著者」については、ある意味において、大乘仏典の「著者」とよく似たところがある。大乘仏典は周知のごとく、ブッダの滅後何百年も経ってから書かれたもので、それぞれ著者がいたはずである。ところが、それらの経典すべては、ブッダの口から出たコトバとして信じられてきた。⁽³⁾それと同様に、シャンカラの著作として伝統的に継承されてきたテキストの中には、シャンカラの死後、かなり時代が経ってから書かれたものも多いが、それらのテキストはすべて、伝統的にシャンカラのコトバということになっている。

シャンカラの「真作」と考えられる哲学文献だけに依拠して、彼のヴェーダーンタ哲学を理解し、その文献学的な理解をシャンカラ派の宗教伝統における具体的な信仰現象に当てはめると、両者のあいだには大きなずれが生じる。シャンカラ派の宗教伝統はすべて哲学の伝統に還元されてしまい、伝統的に継承されているシャンカラ派の宗教儀礼や信仰的慣習などの具体的信仰現象は、シャンカラの哲学的伝統からの、いわば逸脱としてみなされる。伝統的にシャンカラに帰せられてはいるが、シャンカラの真作ではないテキストが、シャ

ンカラ派の宗教伝統の中で担っている、あるいは担ってきた宗教的な意義が問われないまま、それらのテキストが切り捨てられてしまうことになる。

従来のこうしたシャンカラ研究に関して、インド哲学研究の碩学である中村元博士は『シャンカラの思想』（一九八九年）の中で、シャンカラの著作として伝えられる多数の著書を列挙したうえで、つぎのように論じられている。

以上に列挙した多数の書がシャンカラの真作かどうかということについては、従来の学界における（とくに西洋人学者の）諸研究にしたがった。しかし現在のわたくしは西洋人の学者の手法に大いに疑問をもっている。

西洋人の宗教常識によると、同一人が同一時にカトリック教徒であり、またプロテスタントであることは許されない。その常識をインド思想の研究に持ち込もうとする。矛盾律がきびしく適用される。ところがインド人の宗教常識によると、それが許される。宗教の教えというものは絶対者に近づくための方便であり、仮のものであると考えるから、宗教信仰や教義における矛盾の存在を容認する⁽⁴⁾。

筆者はインド留学中の一九八二年、中村元博士の紹介でチェンナイ（マドラス）の自宅に、ヴェーダーンタ哲学研究で知られたマハーデーヴァン教授を訪問したことがある。マハーデーヴァン教授は『シャンカラの讃詩』（*The Hymns of Śaṅkara*）の著者としても知られているが、欧米のシャンカラ研究の文献学的傾向を厳しく批判された。さらにシャンカラ

に帰せられているバクティ讃詩は、シャンカラが庶民層の人々が理解しやすいように、との配慮で著したものであり、知識層の人々を対象とするシャンカラの哲学文献とは、文献中に使用されている語彙が異なるのは当然であるとも言われた⁽⁵⁾。シャンカラ派におけるシャンカラの思想を掘り下げて理解するためには、シャンカラの「真作」ばかりでなく「偽作」も、シャンカラ派の具体的な信仰コンテキストへと引き戻して捉えなおすことの重要性を、私たちはあらためて認識することができであろう。

二 シャンカラ派の在家信仰とバクティ讃詩

すでに示唆したように、文献学的にシャンカラの「偽作」とみなされるテキスト群の中に、数多くのバクティ讃詩がある。それらの文献はシャンカラ派において、在家信者のあいだで長年にわたってシャンカラの著作として語り伝えられてきた。バクティ讃詩の意味世界は、出家遊行者たちが依拠するシャンカラの哲学書の意味世界とは違って、シャンカラ派伝統における在家信仰のあり方を示している⁽⁶⁾。宗教学者の楠正弘博士の表現を借りれば、「正統とみなされる教義、經典」が信仰生活の中に位置づけられるとき、「正統な教義が教えられる通りの非機能的、純粹經典的意義をもって受けとられるのでなく、機能的に歪曲せられている」と言えるかもしれ

(7) ない。シャンカラ派伝統では、在家者に対してバクティの意義を強調しているが、教義としてのシャンカラの哲学思想が歪曲されているとは認識されていない。それはシャンカラの哲学文献もバクティ讃詩も、シャンカラが説いた正統な教義として受容されてきたからである。こうした状況がシャンカラ派における信仰の動態を示している。

シャンカラに帰せられる「偽作」の内容は、シャンカラ派の宗教伝統において、在家者が日常生活の中でおこなうべき信仰のあり方を示している。例えば、シャンカラ派の総本山であるシュリンゲリー僧院の伝統につながる一般の信仰者たちは、たとえシャンカラの哲学文献は読まないとしても、『バジャ・ゴヴィンダム』(Bhaja Govindam) や『シヴァーナンダ・ラハリー』(Śivānandalahari) などの、シャンカラに伝統的に帰せられているいくつかのバクティ讃詩をよく暗誦している。また、シュリンゲリー僧院では毎日、早朝にそれらのバクティ讃詩がスピーカーから流れ、シュリンゲリーに住む人びとの信仰を喚起している。シャンカラはスマールタ派とよばれるシャンカラ派の宗教伝統の開祖としてみなされ、人びとを救うために生まれた「シヴァ神の化身」(śivavatāra) であると信じられている。こうした庶民的信仰の諸相を、マードヴァ作といわれるシャンカラの伝説的伝記『シャンカラの世界征服』(Śaṅkaradvijaya) も具体的に伝えている。(8) この著者マードヴァ

はシュリンゲリー僧院の第十二代の世師ヴィドヤーランヤ(Vidyāraṇya 出家遊行一三三一年、離身解脱一三八六年 伝承)と同一視されてきた。シャンカラ派伝統において、シャンカラは宗教学でいう「聖者」であるが、かれはただ単なる聖者ではなく、無限に深い神性を内面に秘めた聖者として信じられてきた。つまり、シャンカラ派信仰者にとっては、シャンカラはシヴァ神と同定される尊師なのである。また、シャンカラ派僧院の長である世師すなわちシャンカラチャーリヤは「シャンカラの化身」であるとも信じられている。(9)

世師は解脱をめざす出家遊行者にとって「師(アーチャーリヤ)」である。また同時に世師は在家信者にとつても師である。出家と在家の両レベルにおいて、世師とのあいだに「師弟関係」(guruśiṣyaśambandha) が成立している。ただし、師と弟子のあいだの意味構造は両レベルでかなり異なっている。出家遊行者は世俗社会を捨離し、ただひたすら解脱に到達するために、聴聞・思惟・瞑想の修行法に従って世師から指導を受けている。ところが、在家信仰者は一般的に、出家遊行者のようにヴェーダーンタ哲学に関する知識をもっているわけではないが、シャンカラ派において自らに課せられた「恒常の儀礼」(nitya-karma) などをおこなないながら、世師へのバクティ(グル・バクティ)にコミットしている。在家者にとつて世師は、様々な悩みや苦しみを癒す呪術宗教的な力をもつと信じられ

ている。世師の呪術宗教的な力によつて、病いや苦しみが癒され救われたというエピソードは数多く語り伝えられているし、そうした逸話集も出版されている。⁽¹⁰⁾ またシャンカラの伝説的伝記には、シャンカラが数々の奇跡をおこなう聖者として描かれている。例えば、シャンカラの直弟子パドマパーダは、自分の親戚の者につきのように言う。

なお、人びとは出家遊行者の長〔シャンカラ〕の蓮華足を崇拜する瞬間、苦痛が滅せられて浄化され、また、〔人びとの〕心が慈悲に満ちて幸運になる。

tathāpy ete pūta yatipatipadāmbhojabhajana-
ksanakṣinakeśāḥ sadayāhrdayābhāḥ sukrīnāḥ⁽¹¹⁾

シャンカラチャーリヤ信仰とでもよぶことのできる在家者の信仰を、シャンカラに帰せられる哲学書も後代の哲学書も全く記してはいない。しかしながら、こうした信仰現象はシャンカラ派の宗教伝統において、長年にわたって続いてきたものである。シャンカラおよび世師へのこうした在家者の信仰が、バクティ讃詩のテキスト成立の背景をなしていると考えられる。在家の人々が救いを求めて、「シヴァ神の化身」である世師（シャンカラチャーリヤ）、さらにシヴァ神やヴィシュヌ神などの神的存在を信仰する。こうした信仰の重要性を強調するバクティ讃詩が、シャンカラの著作として代々、語り伝えられて、人々の信仰を支えてきた。

バクティ讃詩が親から子へ、子から孫へと代々、語り伝えられてきたという具体的な事実は、それらの讃詩が人びとの信仰生活の中で重要な意味をもってきたことを示している。語り伝えられてきたバクティ讃詩は今日、だれもがテキストとして読むことができる。そのコトバがテキストとして読まれるようになる、そのテキストの具体的なコンテキストを考慮しないで、その内容が理解（あるいは誤解）されることにもなる。しかし、そのテキストの意味内容を理解するためには、そのテキストが用いられている信仰的コンテキストへと引き戻して、その内容を把握しようとするのが大切である。そのことによって、私たちはバクティ讃詩の真偽性を文献学的に解明すると同時に、シャンカラ派の宗教伝統において、長年にわたって伝承されてきた在家者の信仰の様相を読みとることができる。それらのテキストは、それらのテキストを生みだしたシャンカラ派の信仰的基盤を反映しているのである。

三 バクティ讃詩のコスモロジーとその構造

シャンカラ派の宗教伝統において、在家の人々のおもな信仰対象は、シャンカラがシュリンゲリー僧院に据えたといわれる母なる神シャーラダーとともに、師すなわち世師（シャンカラチャーリヤ）である。世師は「生身解脱者」（jīvamukta）

であるといわれ、世師そのものが存在世界の普遍的な根本原理ブラフマン（「アートマン」）の体現者なのである。したがって、出家遊行者にとっては、世師のみが自らを解脱へと導くことのできる唯一の師である。このことはシャンカラが在家信者たちのシャンカラチャーリヤ信仰において、「シヴァ神の化身」として神格化されていたことと同じ意味あいをもつ。こうした事實は、例えば、空海の真言密教において、師すなわち阿闍梨こそが弟子にとって宇宙の本質的實在たる大日如來の体現者であるとの修行僧レベルの信仰が受け継がれてきた一方で、それと同時に、庶民レベルにおいて空海が、いわゆる大師信仰のなかで神格化されていた信仰現象とパラレルを成している。このように讃詩のテキストは、神あるいは師への敬虔なバクティ（信愛）をモチーフとしている。こうした事實は、シャンカラ派伝統における在家者の信仰のあり方を示している。

シャンカラの不二元論哲学によれば、神へのバクティはあくまでも解脱へと間接的に導くものであり、知識の獲得こそが不可欠である。したがって、それへの最良の方法は出家遊行である。そのことは不二元論的思想の存在論的構造からみれば自明のことである。⁽¹²⁾ところが、文献学的に「偽作」とみなされる哲学文献や讃詩のテキストでは、バクティが解脱に到達するための手段として尊重されている。こうした事

実は、シャンカラ派の宗教伝統における具体的信仰現象を示すシャンカラの伝説的伝記（『シャンカラの世界征服』）の内容とも対応している。シャンカラの伝説的伝記では、無属性ブラフマンの世界と有属性ブラフマンの世界が、ともに「最高の境地」として優劣の別なく、同じ次元に並置されている。つまり、在家者の信仰の意味世界は、出家遊行者のエリート的信仰の意味世界とずれたかたちで、シャンカラ派独自の民俗的コスモロジーを構成してきたと言えるであろう。文献学的にシャンカラの「真作」として考えられる哲学書の枠組や語彙から判断すれば、バクティの救済論的意義を強調する讃詩はもちろんシャンカラの著作ではない。ところが、シャンカラ派の信仰者たちやインド人研究者たちは共通して、シャンカラが知識層の人々へ向けて哲学書を著したのに対して、一般の庶民層のためにバクティ讃詩を著したと確信している。ここで重要なポイントは、シャンカラが語りかけた人びとの対象が異なれば、その内容、表現方法さらに語彙も当然違っていたと考えられるということである。

数多くのバクティ讃詩は、文献学的にシャンカラの「真作」であろうが「偽作」であろうが、長年のあいだ、シャンカラ派の人々のあいだで、シャンカラが著したテキスト、すなわち聖典として親しまれて伝承されてきた。今日でもなお、それらは救いを求める在家の信仰者たちにとって、信仰的な意

シャンカラの哲学への宗教的視座（澤井）

二六四

味を依然として失っていない。こうした事実、シャンカラ派の宗教伝統においても、ラーマーヌジャ派やマドヴァ派などの宗教伝統と同様、在家の信仰者たちは、神あるいは世師へのバクティを志向してきたという庶民的信仰の具体的事実を示している。庶民的信仰を反映しているバクティ讃詩が強調する、いわゆる「バクティ」の信仰的志向性は、意味論的にみれば、神的存在への関わりかたを根本的枠組とし、神的存在と人間のあいだには深淵が存在していることを前提としている。このことは、人間存在が超越的な神と連続しているのではなく、非連続の関係にあることを暗示している。ただ、シャンカラ派における讃詩によれば、この非連続の道は母なる神シャラダーの恩寵によって人間存在の有限性を超越することができ、「明知」(vidyā)それ自体である母なる神と一体になることができる点に特徴がある。シャンカラ派の讃詩のテキストをひもとくとき、庶民的信仰の構造は、超越的なものと人間の合一性あるいは一体性(ブラフマンとアトマンの一体性)を強調する、出家レベルにおける信仰の意味構造と共通した特徴をもっている。

- 1 拙論「シャンカラ派僧院の歴史と伝承」『東方学』第七〇輯、一九八五年参照。
- 2 シャンカラの著書の真偽性の判断基準については、Paul Hacker,

"Eigentümlichkeiten der Lehre und Terminologie Śaṅkaras," *Zeitschrift der deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 100 (1950): 246-286; *Kleine Schriften*, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GMBH, 1978 および Sengaku Mayeda, *Śaṅkara's Upadeśasāhasrī*, Tokyo: The Hokuseido Press, 1973 参照。

- 3 シャンカラの著作に関する問題性については、日本印度学仏教学会第六三回学術大会の第三部会(二〇一二年六月三〇日、鶴見大学)において、佐々木閑教授と下田正弘教授のあいだで交わされた大乘仏典の著者性をめぐる議論とも密接に関連していると考えられる。

- 4 中村元『シャンカラの思想』岩波書店、一九八九年、九一九二頁参照。

- 5 T. M. P. マハーデーヴァン教授とのインタビュー、チェンナイ(同教授の自宅)、一九八二年一月一〇日。Cf. T. M. P. Mahadevan, *The Hymns of Śaṅkara*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1980.

- 6 出家遊行に関するシャンカラの思想については、Yoshitsugu Sawai, "Śaṅkara's Theory of Saṃnyāsa," *Journal of Indian Philosophy*, vol. 14, no. 4, 1986 を参照。

- 7 楠正弘『庶民信仰の世界』未来社、一九八四年、一六一一七頁。

- 8 Cf. Mādhava, *Śaṅkaradiḡvijaya*, Ānandāśrama Sanskrit Series, no. 22, Poona: Ānandāśrama Press, 1891.

- 9 シャンカラ派の思想と信仰の関わりについては、Yoshitsugu Sawai, *The Faith of Ascetics and Lay Śmārtas: A Study of the Śaṅkaran Tradition of Śringeri*, Vienna: Sammlung de Nobili, Universität Wien, 1992 を参照。そのほか、拙論「シャンカラと救い」『印度学仏教学研究』第四十一巻第一号、一九九二年、三九—四三頁、お

よび拙論「シャンカラチャーリーヤ信仰の意味世界」『密教文化』第一八一号、一九九三年、二五―三九頁を参照。

10 世師の逸話に関しては、例えば、現在の第三六代世師の逸話によつて、K. Suresh Chandar, *Inspiring Saint: Life and Teachings of His Holiness Jagadguru Sri Bharathi Theertha Mahaswamigal*, Chennai: Sri Vidyatheertha Foundation, second edition: 2002 (first edition: 1995) を参照。その他、R. Krishnaswami Aiyar, *The Saint of Sringeri*, Madurai: Sri Ramakrishna Press, 1977 および拙論「シャンカラチャーリーヤ信仰の意味世界」『密教文化』第一八一号を参照。

11 Mādhava, *Śaṅkaradvijaya*, XIV.106cd, p. 494.

12 Cf. Yoshitsugu Sawai, "Śaṅkara's Theory of Saṃnyāsa," 1986.

〈キーワード〉 シャンカラの哲学、シャンカラ派、世師、バクティ

讃詩、師弟関係、バクティ

(天理大学教授・Ph.D.・博士(文学))

新刊紹介

本多 至成 著

『雑宝蔵経』の研究

A五版・七六八頁・本体価格二二、〇〇〇円

永田文昌堂・二〇一二年七月